

## &lt;報告&gt;

**武満徹のポップ・ソングス考察**  
 — 生誕90周年に寄せて —  
**Consideration for Pop Songs of Takemitsu**  
 — For 90th Anniversary of His Birth —

本島 阿佐子 MOTOJIMA Asako    丸山 和範 MARUYAMA Kazunori

世界のタケミツが音楽家を目指した原点は、戦争中に聞いた1曲の「うた」だった。現代音楽の分野で世界的に活躍した作曲家武満徹が創る「うた」は、意外なほどポップでシンプルだ。現代音楽家として世界に名を馳せた武満徹(1930-1996)は、同時に、映画、演劇、テレビ番組の音楽も多く手がけ、実用音楽の世界でも活躍した。「アカデミック・エンターテインメント」—そのタケミツのポップ・ソングをクラシック音楽の本島がジャンルをクロスオーバーして挑戦する。そこには、やはりクラシック音楽を基盤に、しかしポップス、ジャズ、歌謡曲など様々なジャンルの音楽界で多く活躍する丸山がその経験をもとに多種多様なアレンジをほどこし、心から楽しむ音楽を真面目に追求し、コラボレーションCDの制作を試みた。

キーワード：ポップ・ソング、アカデミック・エンターテインメント、ジャズ、歌謡曲、歌曲

武満の身体の中には昭和戦中戦後の日本の大衆音楽の変遷が浸透しており、そのメロディーには大正浪漫から昭和歌謡、当時の外来洋楽などのエキスがたくさん盛り込まれている、と丸山は分析する。そのために、武満の音楽構成、フレーズの形成とフレーズから次のフレーズへの形成パターンは、いわゆるポップスやジャズの「常識的な形式パターン」から時折はみ出す。その突飛な和声進行や音楽的アンバランスさの中に、彼のオリジナリティがにじみ出ることが理解できる。

1930年10月8日東京に生まれた武満は翌月父の赴任先である大連へと赴く。ジャズ好きの父の影響で子守唄がわりにジャズを聞く。終戦を迎え、14歳の徹少年は埼玉の陸軍に泊まり込んで勤労動員として働いていた。そこで出会った一曲のシャンソン《パルレ・モア・ダムール 聞かせてよ愛の言葉を》(リシュエヌヌ・ボワイエ)で音楽の道に進むことを決意した。(「はじめての武満徹」『芸術新潮』(2006年5月号) p.25)

若い頃は年間300本の映画を見たという武満が、40年間に及ぶキャリアで手がけた映画音楽は100本にもなった。武満のポップ・ソングはいわゆる「歌曲」として独立して作曲されたものではなく、主にこれらの映画の挿入歌およびエンディングのために作られたものである。武満の原点はジャズとシャンソンであり、映画音楽で成長したという「うた」とは切り離せないことは意外であり、大変興味深い。

シャンソンとジャズ、人間のドラマを描いた映画作品から生まれたポップ・ソングを歌うにはクラシックの歌唱法を離れ、言葉を語る必要があると確信し、自由な歌唱を追求した。

■ CD タイトル：『うたうだけ』武満 徹ソング集

うた：本島阿佐子／ピアノ・編曲：丸山和範

■収録曲

1 島へ 井澤満(詩)

- 2 ○と△の歌 武満徹（詩）
- 3 翼 武満徹（詩）
- 4 素晴らしい悪女 永田文夫（詩）
- 5 三月のうた 谷川俊太郎（詩）
- 6 恋のかくれんぼ 谷川俊太郎（詩）
- 7 うたうだけ 谷川俊太郎（詩）
- 8 めぐり逢い 荒木一郎（詩）
- 9 La Neige 雪 瀬木慎一（詩）
- 10 Waltz ワルツ 岩淵達治（詩）
- 11 明日ハ晴レカナ、曇リカナ 武満徹（詩）
- 12 燃える秋 五木寛之（詩）
- 13 昨日のしみ 谷川俊太郎（詩）
- 14 見えないこども 谷川俊太郎（詩）
- 15 小さな部屋で 川路明（詩）
- 16 小さな空 武満徹（詩）
- 17 死んだ男の残したものは 谷川俊太郎（詩）

収録年月日

2020年3月27日、28日、7月17日

レコーディングエンジニア

高田勇児

## ■武満徹作品における歌曲について（丸山）

前提として、武満徹の音楽語法についての概要を確認しておく。

彼は西洋音楽作曲の学習過程は清瀬保二に師事した他ほぼ独学とされているが、和声学、対位法などは学習するとして、東京芸大作曲科入試に3回落ちて入らなかったという事実がある。また、ベートーベンやメンデルスゾーンなど西洋音楽にはほとんど興味を示さなかったと言う。また、叔母は生田流箏曲の師範である。

また、戦争中隠れてシャンソンのリュシエンヌ・ボワイエの《聞かせてよ愛の言葉を》を聴いて衝撃を受け作曲家になる事を決めたという。

更に、戦後のラジオで、ドビュッシーやラベルなどの近代フランス音楽に親しみ、横浜の米軍キャンプでの労働中、デューク・エリントンなどのビッグバンドジャズ、ビル・エバンスのジャズピアノなどを好んで聴いていたという。

そういった音楽体験の彼の作品への影響は、例えば、初期のピアノ曲《遮られない休息》に見られるドミナント系和音に不協和な付加音がジャズで言うところのテンションとは異なる方法で同時に鳴ると言うことに影響されている一例である。

また、《遮られない休息》に見られるヘテロフォニックな語法は、ジャズピアニストがソロを弾く場合に見られる、メロディーとコードのまばらな同時状態であると同時に、邦楽に見られるメロディーとその変奏の同時状態であり、叔母の箏曲の影響もある。

更に、管弦楽曲《弦楽のためのレクイエム》は、ジャズのドミナント系のコードとモードが見え隠れする中、

メシアンの語法である、メロディーの増4度の多用が見られ、その後の彼の作品に、随所にメシアンの影響下の46の和音や、移調の限られた旋法第2（コンビネーションディミニッシュスケール）などが、メシアンと異なったリズム構造や対位法で使われている。

一方声楽曲であるが、映画音楽作曲の延長線上に作られた《○と△の歌》や《燃える秋》もあるが、殆どが、友人の詩人、谷川俊太郎との共同作業である。

曲調は、米軍キャンプ時代に聴いたスイングジャズの延長線上のもの、タンゴやラテン音楽よりのもの、60年代アメリカンポップスや日本の昭和初期から戦後の唱歌、叙情歌、流行歌よりのもの、もあるが（詳細は曲別解説）、メロディーフレーズの生成発展方法が、所謂、ポピュラー音楽の定型を度々逸脱しており、ジャズコードのII<sup>m</sup>7-V7の処理ができないものが多いので、その逸脱した部分の例外的なコード処理をする事が多いので、彼独自のポピュラー音楽ともいえる。

## ■収録曲とアレンジ解説（丸山）

### 1 鳥へ 井澤満（詩）

#### 【楽曲】

1983年11月5日放送、NHK大阪のTVドラマ『話すことはない』（脚本＝井澤満）の挿入歌として作曲されたが、ドラマでは使われず翌12月17日の東京混声合唱団演奏会で合唱曲として初演された。

#### 【アレンジ】

原曲はブルース的なコードが付き、その方向によりジャズコード、フレーズを使用したアレンジとなっている。

### 2 ○と△の歌 武満徹（詩）

#### 【楽曲】

元非行少年の手記を題材にした、映画『不良少年』（監督＝羽仁進、岩波映画／新東宝、1961年）の主題歌。

#### 【アレンジ】

アレンジポイントは、コミカルなオスティナートを全曲につけた事である。

### 3 翼 武満徹（詩）

#### 【楽曲】

1982年2月、東京の西武劇場で行われたアーサー・コビットの演劇『ウイングス』（恩地日出夫演出）公演のために作曲。劇中、市原悦子によって歌われた。

#### 【アレンジ】

アレンジポイントは、原曲よりフリーでRubatoなBalladeスタイルで、コード進行的にはブルース的な処理をし、ピアノのリフ（riff）を多用している。

### 4 素晴らしい悪女 永田文夫（詩）

#### 【楽曲】

石原慎太郎の短編『明日に船出を』を映画化した『素晴らしい悪女』（監督＝恩地日出夫、東宝、1963年）の主題歌。プエルトリコ人という設定の主役＝鹿内たかしが劇中で歌うため、ラテン音楽評論家の永田文夫がスペイン語の歌詞を書いた。

#### 【アレンジ】

映画ではトリオ・ロス・アミーゴスがタイトルバックで歌っているという作品。主人公の青年がプエルトリコ人であるという設定からか、歌詞は懐かしいプエルトリコへの望郷の想いをぶつける歌になっている。が、音楽はバリバリのアルゼンチンタンゴ。まるでアストル・ピアソラが書いたかのようなモダンタンゴである。武満にしては、珍しくタンゴ、ハバネラの曲であり、スペイン語である。アレンジポイントは、ピアソラ的なクロマティックな偶成和音を連続させ、リズムに乗って刻んだり、アルペジオティックに伴奏したりしている。

### 5 三月のうた 谷川俊太郎（詩）

#### 【楽曲】

W. P. マッグヴァーンの同名のサスペンス小説を映画化した『最後の審判』（監督＝堀川弘通、東京映画、1965年）の主題歌。後藤芳子によって歌われた。

#### 【アレンジ】

原曲はb minor、モデラートの3/4の暗い歌曲である。アレンジポイントは、全体をRubatoのBalladeとして自由な掛け合い的な曲とし、ハーモニーには、オルタードドミナントスケールを多用し、b音のペダルトーンを中心に工夫した。中間部は若干高揚するが全体に沈潜した暗い世界である。

### 6 恋のかくれんぼ 谷川俊太郎（詩）

#### 【楽曲】

村松梢風の3つの短編を素材につくられた映画『斑女』（監督＝中村登、松竹、1961年）のために作曲。ベギー葉山によって歌われた。

#### 【アレンジ】

アレンジポイントは、原曲はコミカルで軽妙な曲調に、とおoryんせ、とおoryんせ、ここは何処の細道じゃ、のフレーズでイントロが始まり、それを裏切るマーチに突然変わって歌になる。また感想には、もういいかい、まあだだよ、が挿入されている。明暗2つが交錯するコミカル性を強調した。

### 7 うたうだけ 谷川俊太郎（詩）

#### 【楽曲】

1958年鎌倉で作曲。この曲と《燃える秋》のピアノ伴奏は作曲家自身による。詩人・谷川俊太郎の作詞。

#### 【アレンジ】

武満は、この曲でデューク・エリントン《In a Sentimental Mood》やガーシュインのスタンダード的なスロー形式の歌曲を目指した形跡があるが、サビで笠置シズ子の歌った昭和歌謡的な展開もあり、ジャズスロー形式にはまらないコード進行による編曲になっている。イントロ、間奏、エンディングは、この曲のメロディーやコード進行とは無関係なアイデアが必要となっている。

### 8 めぐり逢い 荒木一郎（詩）

#### 【楽曲】

映画『めぐり逢い』（監督＝恩地日出夫、東宝映画、1968年）の主題歌。

#### 【アレンジ】

アレンジポイントは、イントロはご存知アンドレ・ギャニオンの同名の曲で始まる。この曲のメロディーは、歌謡曲というよりも70年代カーペンターズ的なアメリカポップス寄りの志向が見られる。松田聖子の《Sweet Memories》を彷彿とさせるフレーズ展開があるが、内山田洋とクールファイブ的なムード歌謡に移行する境界

的なフレーズもあり、比較的安定したポップスとなっている。サビで違う世界観のマイナーな部分になるのは、古典派的な対比概念であり、また長調に戻る再現部は三部形式である。エンディングは再びアンドレ・ギャニオンになって終わるといふ、劇中劇的な二段構造になっている。

### 9 La Neige 雪 瀬木慎一（詩）

#### 【楽曲】

映画『白と黒』（監督＝堀川弘通、東京映画、1963年）の主題歌。美術評論家の瀬木慎一によるフランス語の歌詞。岸洋子によって歌われる。

#### 【アレンジ】

イントロ、間奏に、ドビュッシーのピアノのための《前奏曲集》第1巻〈沈める寺〉の1フレーズが使用され、もう一つの挿入フレーズは、雪の降る描写の工夫のフレーズを置いている。最後に、アダモの有名なシャンソン《雪が降る》の1フレーズを歌い、全体に、幻想的な雪のシーンを演出したアレンジとなっている。

### 10 Waltz ワルツ 岩淵達治（詩）

#### 【楽曲】

安部公房の同名の小説を映画化した『他人の顔』（監督＝勅使川原宏、勅使川原プロダクション、1966年）の主題歌。ドイツ文学者・演出家の岩淵達治によるドイツ語の歌詞がつけられ、前田美波里がビアホールのシーンで歌った。

#### 【アレンジ】

イントロは、武満のピアノ曲、《遮られない休息》《閉じた目》といった曲はどちらかというとならぶジャズ理論で言うオルタードミナントスケールやコンビネーションディミニッシュスケールの音が使われており、そういった彼のジャズ音楽の延長線上のコードを使用して、メロディーに入る。

ドイツ語であるが、曲調はシャンソンのパダンパダンにも似たコードを使用しているが、シャンソン歌手、ウテ・レンバーを意識したキャバレーソング的なアレンジとなっている。2コーラス目は動きを少し付けたバリエーションとなっている。

### 11 明日ハ晴レカナ、曇リカナ 武満徹（詩）

#### 【楽曲】

音楽を担当した映画『乱』（日本ヘラルド映画、1985年）のロケ現場を訪れた武満がスタッフのために即興で作った。スタッフが天気を案じるのは天気が悪くなるとウイスキーをかかえて部屋にこもってしまう黒澤明監督のことだといふ。

#### 【アレンジ】

アレンジポイントは、原曲はコミカルで軽い曲調であるが、逆に、ペースのあるスローなアズナブルの《お前はとめどない》(Tu t'laisses aller) 的なコードと伴奏形、スイングジャズにしている。

### 12 燃える秋 五木寛之（詩）

#### 【楽曲】

五木寛之の同名の小説を映画化した『燃える秋』（監督＝小林正樹、三越／東宝、1978年）の主題歌。ハイファイセットによって歌われた。ピアノ伴奏譜も武満自身による。

#### 【アレンジ】

武満としては完全にビジネスライクに徹した仕事だったようだが（五木に歌詞には英語を入れた方が売れると言われたらしい）、武満夫人によると生前の武満のレコードでもっとも印税収入が多かったとのこと。第2回日本アカデミー賞・最優秀音楽賞を受賞した。

アレンジポイントは、ハイファイセットが原曲を歌い、田辺真一が編曲をしている歌謡曲のパターンよりも、フリオ・イグレシアスのようなラテンポップスの緩やかな曲調となっている。コードはほぼ崩していない。

### 13 昨日のしみ 谷川俊太郎（詩）

#### 【楽曲】

谷川俊太郎が12の詩を書き下ろし、6人の作曲家が2曲ずつ作曲して毎月掲載するという、月刊誌『ザ・ゴールド』の企画により作曲。同誌1995年10月号に掲載。

#### 【アレンジ】

エリントンやガーシュイン、コール・ポーターらに見られるブルース的な歌曲であり、これにジャズコードをリハモナイズした編曲になっている。

イントロとエンディングに、Si b - Mi の繰り返しが見られるが、『シミ』をかけている。

### 14 見えないこども 谷川俊太郎（詩）

#### 【楽曲】

映画『彼女と彼』（監督＝羽仁進、岩波映画、1963年）の主題歌。岸洋子によって歌われた。

#### 【アレンジ】

拍子は2/2 (In Two)、ゆったり感の1コーラス目だが、間奏で多少動き出して2コーラス目以降軽いボサノバになり、二回目の間奏でボサノバとなる。メロディーはアンニュイな短調のラインであるが、ジャズ曲としてのコード進行を載せると、ジャズの領域に入る曲となる。

### 15 小さな部屋で 川路明（詩）

#### 【楽曲】

新日本放送（現在の毎日放送）のラジオ番組『私の歌』のために作曲。1955年8月の歌として放送された。

バレエ・ダンサー川路明の作詞。

#### 【アレンジ】

拍子は2/2 (In Two) のスイングジャズにアレンジした。原曲も、武満はそれを狙ってはいるが、ハーモニーがジャズの方向性を目指すも中途半端なコードに終始しており、そこを two-five モーションする事でジャズ的なコードとした。そうする事で昭和初期に進駐軍によって輸入されたアメリカジャズ音楽を、武満は自作で表現しようとしていたのが克明である。エンディングは、スキヤットを加えた。

### 16 小さな空 武満徹（詩）

#### 【楽曲】

1962年、TBS ラジオで毎夕放送された、こどものための連続ラジオ・ドラマ『ガン・キング』の主題歌。

#### 【アレンジ】

ほぼ原曲のワルツであるが、中間部にジャズワルツのアドリブフレーズを入れ、軽いテイストを表したが、内容的にノスタルジーの方向性は変えられない。



## 17 死んだ男の残したものは 谷川俊太郎（詩）

## 【楽曲】

1965年4月22日、東京・全電通会館ホールで開かれた《ベトナムの平和を祝う市民の集会》のために作曲。友竹正則によって歌われた。

## 【アレンジ】

原曲はシンプルなコード進行と同じメロディーの繰り返しであるのに対して、イントロ、間奏、エンディングにジャズ系のテンションコードや複合コードを多用している。

## ■考察（本島）

現代音楽の巨匠、武満の作品というと身構えるが、そのポップ・ソングは驚くほど人間臭く、シンプルで親しみやすかった。シャンソンとジャズがルーツの武満の「うた」には人間のドラマが詰まっており、多くの映画作品から生まれたポップ・ソングを歌うにはクラシックの歌唱法を離れ、言葉を語る必要があると確信した。

歌曲の唱法はまず歌詞の解釈をし、「楽譜に忠実に」また「美しい声」「響の豊かな声」が必要だが、ポップ・ソングではクラシックで染み込んだ感覚を手放し、より自由な表現を目指した。シャンソンのイメージで歌詞に寄り添うと、話し声のまま歌を語るような口調で歌うのはごく自然なことで、自分がより解放されるのが感じられた。

クラシックの、ましてや難解と言える現代音楽の世界にいた武満も、1995年これらの歌を編曲者の手に託してCDを出した時（石川セリ『翼 武満徹 ポップ・ソングス』日本コロムビア）「きっと多くの方が、なぜクラシックの、しかもこむずかしい現代音楽を書いている作曲家がこんなアルバムを作ったりするのか、不思議に思われたらろう。『翼』といううたにもかいたように私にとってこうした営為は、「自由」への査証を得るためのもので、精神を硬く閉ざされたものにせず、いつも柔軟で開かれたものにしておきたいという希いに他ならない」、と述べている。（『武満徹：SONGS』2000、p.129）本島はもちろんのこと、歌謡曲やジャズの世界で多様に活躍している丸山もクラシックの基盤をもつということで、武満のように、ジャズやシャンソンだけの色には染まりきらない。いわゆる一般的に言われるジャズやシャンソンではない、「どこか違う」ということに否定的だったが、今回の録音で、武満の音楽の自由さに見習い、「こうでなくてはならない」を外し、自らのオリジナリティと考えるようになった。

今回の、ポップ・ソングの研究はまた、ミュージカル音楽とも繋がっており、本島が地声のポップス唱法に挑戦したことは、ミュージカル唱法研究に役立った。また、丸山のクリエイティブな音作りは、次の時代のオリジナルなポップ・ソング、ひいてはミュージカルの創作につながった。今後は新しいミュージカル制作のコラボレーションへと発展させたいと思う。なお、新型コロナの影響で録音制作が遅れたことをここにお詫びする。

## ■参考文献

編集部『芸術新潮』、新潮社、2006年

編集部『Toru Takemitsu 武満 徹：SONGS』作品ノート、日本ショット株式会社、2000年、pp.128-129

Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/武満徹>（2020.09.22 閲覧）

高見一樹 コラム 「没後20年を迎える作曲家・武満徹が遺した〈映画音楽〉の世界～映像、音の、想像の庭へ～」  
<https://mikiki.tokyo.jp/articles/-/10117> 2020.09.20 閲覧

## ■謝辞

本研究は2019年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）を受給しました。心より御礼申し上げます。

